



Title	マクルーハンのリテラシー論：E・ハヴロックとの接点
Author(s)	柴田, 崇
Citation	文芸学研究. 2010, 14, p. 1-22
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/46103">https://doi.org/10.18910/46103</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# マクルーハンのリテラシー論

E・ハヴロックとの接点<sup>(1)</sup>

柴田 崇

## はじめに

留学先のケンブリッジ大学トリニティ・ホールでニュークリティシズムの洗礼を受け、1942年にエリザベス朝の詩人T・ナッシュについての論文で同大から博士号を取得した英文学者M・マクルーハンが、1960年代にメディア・グル（導師）と呼ばれるようになるには、何人かの異才との出会いが必要だった。本稿では、主著『グーテンベルグの銀河系』（1962）と『メディアの理解』（1964）に登場するリテラシー論を取り上げ、その特異な理論が形成される過程を追跡する。

第一章では、導入として、マクルーハンがメディア研究に着手するに至った経緯を概観する。第二章では、「メディアはメッセージ」という最も知られたテーマを解題し、マクルーハンがメディア研究者として挑んだ課題を明らかにする。第三章では、マクルーハンのリテラシー論が、この課題への暫定的な回答であったことを確認した上で、同時代の文化論や先行するリテラシー論との比較からその特異性を考察する。そして、その特異性を軸に、マクルーハンがメディア研究者になるために必要だったと考えられる影響のベクトルを推理する。

結論を述べれば、マクルーハンのリテラシー論には、いわゆるトロント大学コミュニケーション学派の先達であったE・ハヴロックのそれとの顕著な類似性が見られる。『国家』におけるプラトンの詩人追放を口承時代との決別の印と解釈したハヴロックが『プラトン序説』（1963）で展開した議論とマクルーハンのリテラシー論の接点を明るみに出し、両者の影響関係を考察するための準備を整えることが本稿のテーマとなる。

## 1 メディア研究に至る経緯

### 1.1 その生涯（1911～1980）

マーシャル・マクルーハン (Marshall McLuhan) は、1911 年にカナダのアルバータ州エドモントンで生まれた。エンジニアを目指して 1928 年にマニトバ大学に入学するが、途中で専門を工学から英文学に変え、1933 年に英文学の学士号、翌年に修士号を取得する。1934 年、奨学金を得てケンブリッジ大学トリニティ・ホールに留学するも、マニトバ大学の修士号が認定されず、学士課程に再入学することになる。1936 年に学士号を取得してカナダに帰国し、ウィスコンシン大学でグラジュエイト・アシスタントの職を得る。1937 年にはアメリカのセントルイス大学に異動し、英語学を教える。同大に籍を置いたまま、1939 年から翌年にかけて渡英し、ケンブリッジ大学から修士号を取得する。この時の指導教授は、シェイクスピア研究の権威として知られた M・C・ブラッドブルックだった。修士号取得後、セントルイス大学で教壇に立ちながら博士論文を準備し、1943 年に、エリザベス朝の詩人のトマス・ナッシュについての論文 (“The place of Thomas Nashe in the learning of his time”) でケンブリッジ大学から博士号を取得した<sup>(2)</sup>。1944 年、アメリカからカナダに戻り、アサンプション大学を経て 1946 年にトロント大学に移り、1952 年、同大教授に就任した。

1960 年代に入ると、マクルーハンの発言は、北米を中心にアカデミズムの枠を超えた議論を巻き起こすようになっていた。1960 年代後半には日本でも「マクルーハン旋風」が吹き荒れ、一種の社会現象にまで発展したが、ちょうどこの頃、脳に腫瘍が見つかる。手術を受けるも後遺症が残り、記憶障害や雑音に対する過敏反応などに悩まされるようになった。以後、健康面では芳しくない状態が続き、1979 年に大きな脳卒中の発作を起こして左脳を損傷してからは、話すことも読むこともできなくなる。1980 年の大晦日の夜、就寝中に脳卒中を起こして永眠した。生前に公刊された著作は、共編著を合わせると 20 冊を超え、死後も論文集の刊行が続いている。

マクルーハンの共同研究者として多くの作品に登場する長男のエリックは、マクルーハンの死後、その仕事をまとめる作業にも手腕を發揮し<sup>(3)</sup>、現在もマクルーハンの著作を世に送り出している。また、妻のコリーヌは書簡集の編纂、

三女のステファニーは講義とインタビューを集めた作品の編集に携わった<sup>(4)</sup>。

## 1.2 メディア研究との出会い

マクルーハンの名がメディア研究者として知られるようになるには、最初の著作『機械の花嫁』(The mechanical bride, 1951<sup>(5)</sup>) の公刊を俟たなければならぬが、英文学から出発したマクルーハンが、新聞、広告などを対象にしたメディア研究を始める土壤は、既にイギリス留学時代に耕されていた。

1967 年の雑誌インタビュー<sup>(6)</sup>で、マクルーハンは留学時代を次のように回顧している。「私がケンブリッジに着いた頃、イギリスでは、映画や大衆文化の周辺を『言語』のように研究し、理解する風潮が流行し始めていた」(McLuhan, 1967, p. 51)。ケンブリッジで F・R・リーヴィスや A・I・リチャーズの講義を受けてニュークリティシズムに接し、マクルーハンからはいわゆるローカルチャーを研究対象にすることへの偏見が取り除かれていたが、本格的なメディア研究が開始されるには、さらにいくつもの条件が重なる必要があった。

「1936 年、私（マクルーハン）は、ウィスコンシン大学に赴任した。学部一年生の授業を担当してすぐ、彼らを理解できないのに驚かされた。そして、広告やゲームや映画などの彼らが慣れ親しむ大衆文化の研究が急務だと感じた。これは教育学であり、私の教育プログラムの一部だった。ポップカルチャーの世界という彼らの土俵に上ったのは、教育上の方針からだった。また、広告はアプローチするのに極めて便利な形式だった。『機械の花嫁』で広告を取り上げたのも、広告を使うのに許可を必要としないという法的配慮からである。授業では広告の他に映画や雑誌の画像も使用した。私は、30~40 枚のスライドを使って短い講義をした後で、学生に広告について考えるよう促した」(McLuhan, 1967, p. 50)。ニュークリティシズムとの邂逅でローカルチャーの研究への偏見が取り除かれたのに加え、学生を理解するために大衆文化を研究する必要性を痛感したこと、さらに、教材として取り上げるのに法的規制がないという便宜的な理由が重なったところから、マクルーハンのメディア研究は始まったのである。

とはいって、1940 年前半のマクルーハンの研究は、ニュークリティシズムの適用の域を出るものではなかった。ペトルス・ラムス研究の W・J・オングは、ちょうどこの時期にセントルイス大学でマクルーハンに修士論文の指導を受けている。オングは、後にマクルーハンが主宰するメディア研究誌『探究』

(*Explorations*) に参加し、その著作がマクルーハンの主著の一つの『グーテンベルグの銀河系』で頻繁に引用されるなど、弟子という以上に盟友と呼ぶのがふさわしい存在である。オングは、セントルイス大学時代のマクルーハンをこう評している。「当時のマクルーハンのメッセージは、後の著作に登場するメッセージではなかった。当時のメッセージは、ニュークリティシズム、中でもケンブリッジ版のニュークリティシズムだった」(Ong, 1981, p. 130<sup>(7)</sup>)。マクルーハンがケンブリッジ版のニュークリティシズムから脱皮し、メッセージ、そしてメディアの概念に変革を起こすまでに成長するには、まだいくつもの段階が必要だった<sup>(8)</sup>。

### 1.3 メディア研究の発達

マクルーハンがメディア研究の方法論を発展させる上で大きな役割を果たしたのが、『探究』誌だった。1953年、マクルーハンは、人類学者のE・カーペンター、トロント大学の同僚のW・T・イーストバーグとD・C・ウィリアムズらと学際的なメディア研究誌『探究』を創刊した<sup>(9)</sup>。創刊当時の様子をマクルーハンとカーペンターは次のように語っている。「それぞれのコミュニケーションチャンネルは現実をそれぞれにコード化し、その結果、コミュニケーション化されるメッセージの内容に想像を超えた影響を及ぼす。私たちはフォード財団から助成を受けて1953年からトロント大学でこのようなバイアスの研究を始めた。人類学、経済学、英文学、心理学、都市計画の教員たちが一堂に集まり、様々な分野の大学院生を交えて週一回の研究会が開催され、それが二年間続いた」(McLuhan, Carpenter, 1956, p. 49<sup>(10)</sup>)。コミュニケーションチャンネルにはそれぞれ固有のバイアスがあり、メッセージの内容に影響を与えるというメディア研究の問題構制は、こうして1950年代半ばにできあがっていた。

『探究』誌は1959年の廃刊まで9号を重ねたが、その間、人文・社会科学だけでなく、医学・生理学を含む様々な学問領域から寄稿があった。マクルーハンの代名詞とも言える「メディアはメッセージ」(“The medium is the message”)のテーゼが生まれたのは、ちょうどこの時期だった<sup>(11)</sup>。『探究』誌が廃刊した1959年、マクルーハンは、全米教育放送者協会(National Association of Educational Broadcasters and Office of Education)からの助成で「ニューメディア」の研究をまとめ、翌年その成果を“Report on project in understanding new media”の題で発表する。そして、1962年、二つの発明

(アルファベット、印刷技術) が活字人間を形成した過程を検証する『グーテンベルグの銀河系』(The Gutenberg galaxy)<sup>(12)</sup>を公刊し、1964 年には、二つの発明に続く第三の発明（電信）に始まる電気（電子）技術時代のメディアの影響を分析、予測した『メディアの理解』(Understanding media)<sup>(13)</sup>を世に送り出すことになる。

「メディアはメッセージ」は、『探究』誌を通じた研究成果を象徴するものであり、二つの主著に結実するメディア研究の骨子を知るための指標になると考えられる。よって次章では、シャノンらの情報理論が発表された 1940 年代の終わりから、情報理論の電気通信のモデルが一般コミュニケーションのモデルに拡大していく 1960 年代前半を文脈にして「メディアはメッセージ」を解釈し、このテーゼがマクルーハンの理論形成において果たした役割を確認する。

## 2. 「メディアはメッセージ」解題<sup>(14)</sup>

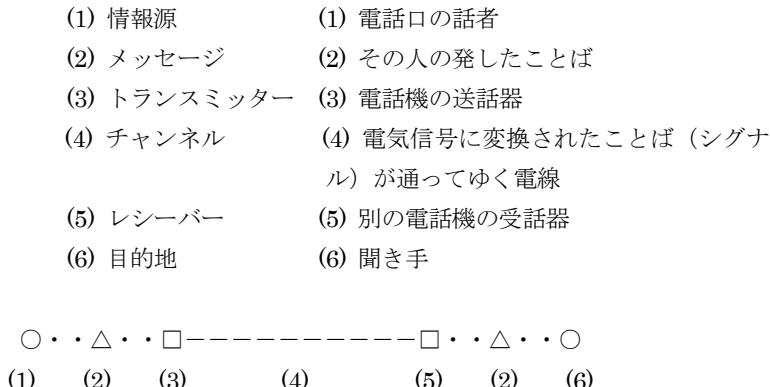
### 2.1 シャノンとウィーヴァーの通信モデル

マクルーハンは『メディアの理解』の中で、C・E・シャノン (Claude Elwood Shannon 1916～2001) と W・ウィーヴァー (Warren Weaver 1894～1978) の情報理論を名指しで批判し、その理由を、情報理論の通信モデルが情報の動きを無視して情報の内容 content を扱い、データを歪める「ノイズ」を監視する一方で<sup>(15)</sup>、情報を伝達する形式固有の機能を無視する傾向があるからだと説明している<sup>(16)</sup>。以下、シャノンとウィーヴァーの通信モデルを概観した上で、通信モデルがヤコブソンの言語モデルで一般化してゆくプロセスを再現しながら、「メディアはメッセージ」のアンチテーゼとしての意義を確認する。

数学者にして電子技術者のシャノンは、ベル研究所に勤務していた 1948 年に、「コミュニケーションの数学的理論」("A mathematical theory of communication") を *Bell System Technical Journal* 誌に二回に分けて発表し、情報理論の基礎を築いた。同論文は、翌年、ウィーヴァーによる一般読者向けの解説を付して『コミュニケーションの数学的理論』(The mathematical theory of communication) として公刊された。情報を数量的に定義し、情報の伝達を科学的に扱う基礎を考案した業績によって、シャノンは「情報通信の父」と呼ばれ、20 世紀最大の数学者の一人に数えられている。その影響は情報通信以外の分野にも及び、シャノンの情報概念や通信モデルをもとに、心理学、生

物学、言語学などに新しい領域が開かれた。

シャノンらが考案した通信モデルの特徴は、メッセージとシグナルを分離することで「流れるメッセージ」の図式化に成功したところにある<sup>(17)</sup>。電話を例に取ると以下のようになる。



上の図から、(3)と(5)、または(4)、または(3)から(5)までを「メディア」と規定する通念が通信モデルに由来することが理解できる。

一連のプロセスを図式化したこのモデルでは、六つ（シグナルを入れれば七つ）の要因がそれぞれの機能を担いながら一つのコミュニケーション像を構成している。そこで(3)(4)(5)の諸要因は、メッセージをシグナルに変換 encode し、そのシグナルを別の場所に伝達した後で再びメッセージに変換 decode するまでの機能を担う点で、「流れるメッセージ」の様態を支える根幹をなす。三つの要因とその機能には、メッセージとシグナルの「承認された変換（通常一对一で可逆的な変換）」を可能にした技術的背景が見て取れる。常態として「承認された変換」を技術的に保証できなければこのような図式化は不可能であるとすれば、通信モデルは、電気通信時代のコミュニケーションを象徴するモデルだったと言える。では、通信モデルは、どのようなコミュニケーション像とメディア概念を提出したのか。

「承認された変換」が常態ということは、情報源から発せられたメッセージが、目的地のメッセージと同一のものであることを要求する。電気技術によって可能になった伝達を図式化するこのモデルは、メッセージの正確な（あるいは

は近似的な) 再現を主題とするコミュニケーション像を提出する<sup>(18)</sup>。仮に、情報源で意図された「メッセージ」の再現に干渉するものがあれば、それらすべての好ましくない付加物は、「ノイズ」と見做される<sup>(19)</sup>。そして、ノイズという変換上の異変が生じた場合には、「承認された変換」の機能を保証していたはずの諸要因((3)(4)(5))に照準があたり、その不備が問われることになる。通信モデルにおけるメディアは、ノイズの発生という形でメッセージに干渉して初めて問題にされる。「メッセージは(=)メッセージ」の等式を保証する諸要因であるメディアは、メッセージに関わるべきでない存在として扱われているのである。

## 2.2 通信モデルの一般化

電気技術に基づく伝達を図式化した後、シャノンとウィーヴァーは、一旦除外していた意味 *meaning* を再び導入するという手順で「真の意味論」を構想していた<sup>(20)</sup>。「メッセージはメッセージ」、すなわち発信者と受信者のメッセージをイコールでつなぐ等式は、伝達の形式を表現したものでしかない。意味の伝達をコミュニケーションの要件と考えるならば、意味の範囲を確定できない以上、この等式でモデルの完成を宣言するわけにはいかない。この課題に一つの解を与えたのは、言語学者の R・ヤコブソン (Roman Jakobson 1896~1982) だった。

シャノンとヤコブソンの接点としては、J・フォン・ノイマンと N・ウィーナーを中心に組織され、工学知識の人文・社会科学への応用を志向したメイシ会議 (メイシー財団の後援で 1946 年から 53 年にかけて 10 回開催された学際的な会議。通称、サイバネティクス会議) が知られている<sup>(21)</sup>。通信工学と言語学の親和性について、ヤコブソン自身が以下のように語っている。「言語の実際の運用の研究には、言語学は二つの関連分野、すなわち通信の数学的理論と情報理論との、素晴らしい成果に大きく助けられてきた。通信工学は、この会議のプログラムにはなかったけれど、シャノンやウィーヴァー、ウィーナーやファノ、あるいは、すぐれたロンドン・グループの著作の影響を受けていない発表はほとんどなかった。皆、無意識のうちに、符号化とか、複合化とか、あるいは冗長度 (余剰度) ……のような、彼らの術語を使っていた。この通信工学と言語学との関係は、正確にはどうなのであろうか。この二つの学問の間に、何か合わないところもあるだろうか。いや、全然ない。実際、構造言語

学と通信工学者たちの研究とは、目的が一致している。それならば、通信理論を言語学に用い、またその逆をするということは、実はどういうことなのであろうか。確かにある点では、情報の交換については工学者のほうが正確にはつきりと系統立てているし、技術的にもしっかりとしている。また量的に表わすという点でも、有望な可能性を見せていると認めざるを得ない。一方、言語学者は、言語およびその構造に関するぼう大な経験によって、工学者が言語資料を扱う際の矛盾や失敗を見付けることができる。言語学者と人類学者との協力のほかに、言語学者が、そしておそらく人類学者も同じだと思うが、通信工学と絶えず協力していくということが、極めて有益なことだと思うのである」（ヤコブソン, 1953 田村訳, 1993, p. 6<sup>(22)</sup>）。

通信モデルを参照したヤコブソンは、以下の言語モデルを提出した<sup>(23)</sup>。

要因	機能
コンテクスト	関説的機能
メッセージ	詩的機能
発信者———受信者	心情的機能———動能的機能
接触	交話的機能
コード	メタ言語機能

通信モデルと同様にヤコブソンのモデルの諸要因も、それぞれが担う機能と対応しながら一つのコミュニケーション像を構成している。通信モデルと比べて一目で分かる違いは、コードとコンテクストという要因が新たに加えられる一方で、トランスミッターとレシーバーが消去されている点にある。

まず、コードという語を検証してヤコブソンモデルと通信モデルとの同一性を確認しておく。コードとは、符号化 encode と復号化 decode の機能の全体を統括する要因である。つまり、メッセージとシグナルの「承認された変換」機能と、それを担う諸要因の総体をあらわす存在と見做すことができる。ヤコブソンが、ラングではなくコードの語を使用したのは、言語伝達をモデル化する際に、常態的に機能する「変換」を前提にしたからだと考えられる。コードが加わると同時にトランスミッターとレシーバーが消えたのは、言語伝達では変換機能を果たす装置が介在しないからではなく、発信者と受信者に変換の機能を果たす装置が埋め込まれているという擬制が働いたからに他ならない。し

たがって、ヤコブソンモデルのメッセージは、発信者と受信者の間に図示される限り、パロールの置き換えではなく、通信モデルのシグナルに相当する。また、コードという要因に対応するメタ言語機能は、発信者と受信者（あるいはどちらか）が、彼らの間で使用されているコードの同一性を確認する必要が生じた時、つまり変換、または再変換に異変が生じた時、発話の照準をコードそのものに合わせるという形で発揮される<sup>(24)</sup>。メッセージの変換に干渉する好みしくない要素をノイズと呼ぶならば、ノイズの発生によりメタ言語機能が稼動すると言い換えられる。ヤコブソンの言語モデルは、ノイズによって変換機能の異変が察知され、コードに焦点が絞られるという因果関係も通信モデルと共有している。

さて、ここで注意したいのは、コンテクストという要因である。もとより通信モデルにはコンテクストという要因は存在せず、コンテクストに相当する機能を果たす要因も見当たらない。コンテクストとは、一般的の意味に対する文脈的意味という意味本来の問題を扱うために不可欠な機能を担う<sup>(25)</sup>。つまり、コンテクストという要因を加えることで初めて意味の問題に対処できるようになるのである。原型としての通信モデルからすれば、「真の意味論」へ道が開かれたことを意味する。コンテクストを通信モデルに加えられた修正と見做すならば、変換と伝達の形式のみを図式化していたモデルが意味 meaning を導入することで一応の完成を見たと言えるだろう<sup>(26)</sup>。

## 2.3 マクルーハンによる通信モデルへの挑戦

通信モデルのメッセージは、ヤコブソンのモデルによって「文脈を考慮したメッセージ」に修正された。こうして、伝達される意味の範囲を「文脈を考慮したメッセージ」とするコミュニケーションモデルが提出された。しかし、「文脈を考慮したメッセージ」を有意味なものと認める一方、メディアは、依然として伝達される意味の対象から除外されている。ヤコブソンモデルは「メディアはメッセージでない」ことを再確認するモデルでもあった。ここで初めて、「メディアはメッセージ」のアンチテーゼとしての性格が了解できる。マクルーハンは、「意味 meaning ではなく、影響 effect」(McLuhan, 1964, p. 26)をメッセージと呼び、メディアこそがメッセージを発していることを宣言して、それまで排除されていたメディアを中心としたコミュニケーションモデルを提出しようとしたのである<sup>(27)</sup>。それでは、マクルーハンは、メディアのメッセ

ージをどのようにして捉えようとしたのか。

「いかなるメディアも、単独ではなく他のメディアとの相互作用の中でのみ、その意味や存在意義を持つ」(McLuhan, 1964, p. 26)。マクルーハンは、単数形のメディアの影響を、複数形のメディアが形成するメディア環境で人間に及ぼされるものと考えた。マクルーハンが複数形のメディアをどのように捉えようとしたのか、それを知る鍵は「内容」という語の特殊な用法にある。「プログラムおよび『内容』をいくら分析しても、メディアの魔法や潜在的作用を解読する手がかりは全く得られない」(*op. cit.*, p. 20)。このように通常理解できる意味で「内容」の語が使用される一方、別の箇所ではマクルーハン特有の用法が見られる。「どんなメディアもその『内容』は常に別のメディアである。ちょうど書かれたことばが印刷の内容であり、印刷が電信の内容であるように、書きことばの内容は話しことばである」(*op. cit.*, p. 8)。「『メディアはメッセージ』とは、電子工学の時代に關していえば、全く新しい環境が生み出されたことを意味している。この新しい環境の『内容』は、工業の時代の古い機械化された環境である」(*op. cit.*, p. vii)。

『メディアの理解』の冒頭にあるように、現代は、3000年に及ぶ西洋史上の第三番目の節目、すなわち、前機械、機械に次ぐ電気技術の時代と規定される<sup>(28)</sup>。マクルーハンは、各時代を、それぞれアルファベット、活版印刷、電信というメディアに支えられた文化史的区分として提示する。各文化を先導した三つのメディアは、特に発明と呼ばれ、発明、あるいは発明が先導した技術を基準にして、雑種 hybrid としての個々のメディアが論じられる。例えば、映画は、「古い機械技術と新しい電気技術との華々しい結婚の産物」(McLuhan, 1964, p. 284) とされる。最初の発明とされるアルファベットには、話しことばを音素という等質の断片的視覚物に翻訳するという特性がある。音声から意味を取り去った後に視覚的コードに移し替えるという表音文字の特性は、新しい技術がそれまでの古い技術に対して占めるコードの地位を示唆するものだった。従来のコード概念がパロールに対するラングの地位を占めるのに対し、マクルーハンのコード概念はパロール（声）に対するアルファベット（文字）の地位を占める。マクルーハンは、アルファベットが声に対して持つ翻訳の機能をアルファベット以外の発明にも認めており、3000 年に渡って新たな技術「形式」が、古い技術を「内容」として翻訳してきた歴史として西欧文化を捉え直そうとした。そして、古い技術に基づく文化的マトリクスを新しい技術が

翻訳するプロセスで人間に及ぼされるものが、メディアの影響だと考えたのである。

次章では、メディアの復権を図ったマクルーハンが通信モデルのオルタナティブとして提出した文化コード論を取り上げ、マクルーハンがしばしば参照した文化論、さらにマクルーハンのリテラシー論にヒントを与えたと考えられる口承詩研究との比較から、その特異性の解明に着手する。

### 3 マクルーハンの文化コード論

#### 3.1 L・マンフォードの文化論との比較

マクルーハンの文化コード論の特異性は、アメリカの文明史家 L・マンフォード (Lewis Mumford 1895～1990) の文化論との比較でより鮮明になる。

マンフォードは、初期の著作『技術と文明』(*Technics and civilization*, 1934) の中で、まず紀元前 1000 年から紀元後 1750 年の間の水力を動力に、木を原料にした「原始技術期」、次いで蒸気機関を動力に、鉄を原料にした「旧技術期」、第三に電力を動力に、合金や軽金属を原料とする「新技術期」の三つに区分している<sup>(29)</sup>。各々の時代は、エネルギー利用のための特殊な技術手段と独特的な生産形式を有し、それぞれ特殊な労働者の型を発達させてきた。その過程で、ある社会的な素質が拡大する一方、他の素質は縮小し、その結果、文化の型が決定する<sup>(30)</sup>。このように、技術が人間に影響を与え、文化の型を決定するという点以外にも、マンフォードとマクルーハンの理論には共通点がある。一つ一つの文化はまとまりのある技術の複合体であり、個々の技術の意味は全体の関係の中でのみ意味を持つ<sup>(31)</sup>というマンフォードの「場」の発想は、単数形のメディアの意義が総体としてのメディアの中で決まると考えるマクルーハンに通じるものがある。

しかし、二人の文化論は、文化間の関係の捉え方では大きく異なっている。マンフォードは、三つの文化史的区分を提出する際に、次のような留保をつけた。「過ぎ去った一千年の時間を回顧してみると、われわれは、機械の体系や機械文明を、連続してはいるが、相互に重なり合い、入り込んでいる三つの面に分けることができる」(マンフォード, 1934 三浦訳, 1942, p. 6)。それそれぞれの文化は、一つ一つのまとまりはあるものの、相互に重なり合い、入り込んでおり、基本的に連続している。マンフォードの場合、三つの区分は文化史全体

の三局面と考えるのがふさわしい。これに対してマクルーハンは、後にパラダイムと言い換えることからも分かるように、一貫してそれぞれの文化を共約不可能なものと考えている<sup>(32)</sup>。マクルーハンは、「発明」の登場をきっかけにして潜在的に「翻訳」あるいはコード化が進行した結果、全く異なる文化がつくれられると考えた。マクルーハンの場合、一つ一つのまとまりとして捉えられる文化の間には、連続ではなく断絶があるのである。

マクルーハンがコード論を着想する過程でマンフォードを参照した可能性は否定できない。事実、マンフォードの名は、メディア研究者マクルーハンの事実上のデビュー作となった『機械の花嫁』の段階で登場し<sup>(33)</sup>、『グーテンベルグの銀河系』ではマンフォードの『棒と石』(*Sticks and stones*, 1934) が、『メディアの理解』では『技術と文明』と『歴史の都市、明日の都市』(*The city in the history*, 1961) が文献表に登場する。しかし、上記のようにマンフォードには文化の間にコード関係を見出す視点が見当たらない。

マンフォード自身は、第二次世界大戦を境に現代を西洋文明史に位置づける作業を止め、同時に三つの文化史的区分の枠組みも放棄した。マンフォードは、それまでの研究に見切りをつけたきっかけを次のように語った。「一方には原子爆弾のように極度に精緻な科学と技術があり、他方には、敵を征服するためではなくに無防備の民衆を手当たり次第に皆殺しにするためにその爆弾を使うというような道徳的低落が存在する」(マンフォード, 1952 生田訳, 1970, p. 10<sup>(34)</sup>)。そして新しい研究主題と解決への道筋についてこう主張した。「今日の大きな問題は現代人の均衡と全体性を回復すること、すなわち機械の救われない連累者となりその犠牲者とならざるに、自らのつくりだした機械を支配する能力を現代人に与えること」(op. cit., pp. 10-11)。「救いの道は、人間個性を機械に実用的に適応させることにあるのではなくて、機械はそれ自身、生活の秩序と組織の必要から生れた産物でありますから、機械を人間個性に再適応させることにあるのです」(op. cit., p. 15)。主題の転回を経た後の著作の『機械の神話』(1967) では、参考文献にマクルーハンの『グーテンベルグの銀河系』をあげ、次のように寸評している。「最も飛躍した最も疑わしい所でも、幸いにも刺激を与えてくれる」(マンフォード, 1967 樋口訳, 1971, p. XV)。

ともあれ、マンフォードの文化論と比較によって、同質性以上に差異が、すなわち、声とアルファベットの間のコード関係を文化間に敷衍したマクルーハンの文化コード論の特異性が明らかになった。次に、リテラシーの変遷という

着想の方に焦点をあて、文化コード論の形成過程に切り込んでみよう。

### 3.2 M・パリーと A・ロードのリテラシー論との比較

『グーテンベルグの銀河系』の末尾は、電子技術時代を主題にする『メディアの理解』の予告で結ばれている。一方、『グーテンベルグの銀河系』の冒頭には、ホメロス研究の M・パリー (Milman Parry 1902～1935) と A・B・ロード (Albert Bates Lord 1912～1991) の名があがり、この本がロードの『物語の歌い手』(The singer of tales, 1960)<sup>(35)</sup>の続編として書かれることが告知されている<sup>(36)</sup>。以下、二人の思想を概観し、マクルーハンとの接点を探る。

二人の古典学者の研究は、ホメロスに代表される口承の物語詩の形式が、文字で記述されたその後の詩の形式と質的に異なることを証明しようというものだった。文字の時代に対置される声の時代の研究は、1930 年代のパリーの仕事を通じてロードに継承され、『物語の歌い手』に結実した。パリーの学問的功績は、『イーリアス』と『オデュッセイア』を口承の伝統の産物とする仮説を立てただけでなく、仮説を証明する際に、議論の焦点を詩歌の内容から詩歌が歌われる実際のプロセスに移行させた点にある<sup>(37)</sup>。パリーは、口承の詩歌に特有の性質があることを証明するために、1930 年当時のユーゴスラビアに残る英雄詩と、ホメロスの叙事詩を対照させる比較文学の手法を採用した。ロードは、文字以前の声の時代の物語詩の形式が、文字で記された物語詩の形式と異なるという仮説と、比較文学の手法の両方をパリーから受け継ぎ、口承詩に特有の「学習」「制作」「伝承」のプロセスを指摘することでホメロス研究に新地平を開いた<sup>(38)</sup>。

1930 年代のホメロス研究者たちは、ホメロスの時代（紀元前 9 世紀頃）に文字が存在したか否かを議論する一方で、『イーリアス』と『オデュッセイア』に登場するエピソード間の非一貫性、その叙事詩の尋常でない長さ、一人の人物（ホメロス）が数地域の方言や数世代の擬古体を駆使する事実に頭を悩ませていた。学界では、ホメロスの詩を複数の作者の作品だとする説が主流で、ホメロスの存在自体を疑う説まで唱えられる有様だった。その結果、研究の労力は、ホメロスの詩を「異なる作者」毎に腑分けする作業や、「原型」となった詩を探す作業に注がれていた<sup>(39)</sup>。こうした学界の状況の中で、ロードの研究は、膨大な長さの詩歌を一つのテーマの下に歌い上げるには「原型」に捕らわれない臨機応変な形式が必要であり、そのためにはエピソード間に非一貫性が生じた

ことを実証したのである。<sup>(40)</sup>

口承詩人たちとは、いくつもの地域で何世代もの間、習慣的に開発されてきた「臨機応変」な形式を、聞き手のためではなく、専ら自分たちの便宜のために<sup>(41)</sup>、「学習」のプロセスで身につけた。そしてその形式を「制作」のプロセスで実現し、再びいくつもの地域にまたがり、何世代にも渡って「伝承」してきたのである。このような口承詩の伝統において最も偉大な詩人がホメロスだった。もちろん、ここで言う詩人は、物語詩の「作者」ではなく、「歌い手」の一人を意味する<sup>(42)</sup>。

マクルーハンが注目したように、確かにパリーとロードの研究には、声の時代と文字の時代を区分する発想が見られる。しかし、二人はともに、研究成果をホメロス研究の範囲に限定し、ホメロスの時代を「声の文化」、ホメロス以後の時代を「文字の文化」と呼ぶことには否定的立場を貫いた<sup>(43)</sup>。この点は、リテラシーの変遷から文化コード論を考案したマクルーハンと相容れない。パリーらのリテラシー論からも、声とアルファベットの間のコード関係を文化間に敷衍する発想の痕跡を得ることはできない。

マクルーハン自身はパリーらの研究との相違点には一切言及していない<sup>(44)</sup>。また、オングは、文学研究の観点からパリー、ロードとマクルーハン、さらにE・ハヴロック（Eric A. Havelock 1903～1988）との連続性を強調した<sup>(45)</sup>。興味深いことに、ここでオングが名前をあげたハヴロックだけが、ホメロス研究の成果を文化論に敷衍するのに消極的なパリーらの姿勢を激しく批判している。ハヴロックとは何者なのか？

ハヴロックはロンドンで生まれ、スコットランドで育った。ケンブリッジ大学のエマニュエル・カレッジで古典研究の素養を身に付け、カナダのアカディア大学を経て、1929年にトロント大学に着任した。1947年にハーヴァード大学に移るので、1946年に着任したマクルーハンと同僚であった時間は、一年程度だったことになる。1963年には古典研究のスターリング・プロフェッサー兼古典学部長としてイェール大学に迎えられ、1971年まで同職にあった。1963年は、ハヴロックの名を古典研究の門外漢にも知らしめた『プラトン序説』（Preface to Plato）<sup>(46)</sup>が公刊された年でもあった。ハヴロックは、同書でプラトンの『国家』における詩人追放の謎に挑み、プラトンとそれ以前の思想家の間にリテラシーの断絶があることを指摘した。そして、詩人追放とは、文字の普及によって訪れる新時代に相応しい教育、すなわちロゴスに基づく哲学によつ

て理想の国家建設をめざしたプラトンが、口承に基づく古いリテラシーの扱い手を駆逐する企てであったという解釈を示し、大論争を引き起した。

ハヴロックは、パリーらがリテラシーと文化の相関に消極的だった点を批判していたことは既に述べた。『プラトン序説』における議論を踏まえると、ハヴロックの批判は以下のように要約できる。まず、リテラシーの意味はそれが文化の中で占める地位の高低に左右されるのだから、リテラシーを文化と切り離して考えることはできない。そして、リテラシーの意味が文化で占める地位によって決まる以上、ギリシャ文化で中心的な役割を果たしたリテラシーと、20世紀初頭の旧ユーゴスラビア文化で周辺的な役割しか果たしていないリテラシーを同列に置くパリーらの比較文学の手法には問題がある<sup>(47)</sup>。

方法への批判はともかく、リテラシー間に位階があり、リテラシーの形成に発明が関与しているというハヴロックの前提是、三つの主要な発明を特定し、各発明の特性を反映したものとして三つの文化史的区分を立てたマクルーハンと類似する。とはいっても、ここまで考察では、『プラトン序説』からは、マクルーハンがコードとの類推で想定したような文化間の断絶を読み取ることはできない。裏を返せば、『プラトン序説』にコード論の痕跡があれば、両者の類似性の推定はより強固なものになるはずである。よって次節では、マクルーハンの文化コード論の論理特性を理解するところから、この論点への解答を探る。

### 3.3 文化コード論の論理的特性——E・ハヴロックとの接点——<sup>(48)</sup>

マクルーハンの文化コード論には、次のような論理的特性がある。そもそもコードとしての文化は、新しい技術が古い技術を翻訳することで形成される。この翻訳作業は、さらに新しい発明が登場し、現在の技術が古いものになる瞬間まで続けられる<sup>(49)</sup>。ある文化の成立は、次の発明によって技術の範囲が画定されることを要件にする。現在の文化はいつ終わるとも知れないコード化のプロセスそのものであり、それをコードというかたちで表象することは、いかに経験的に説得力があろうとも、原理的、または論理的に不可能である。

また、例えば、活版印刷を発明と認める根拠が活版印刷に始まり電信の発明に終わる機械技術の文化的特性にあるように、ある一つのメディアが発明と見做される根拠は前後の文化によって差異化される当該文化の特性に求められる。だとすれば、次の発明が登場しておらず、技術の範囲が画定できない現在は、文化としての要件を欠くだけでなく、技術を先導する発明を電信技術に特定す

る正当性も失うことになる。そして、もし現在の発明を電信と認められない場合、同時に、活版印刷が発明である根拠も失われる、という無限後退に陥る。現在の発明の特定は、常に先取りにならざるを得ないというアポリアを孕む。これが、マクルーハンの文化コード論に内在する論理的特性である。

『メディアの理解』にはこのアポリアへの解答は見られない。マクルーハン旋風が吹き荒れる中、マクルーハン自身は 60 年代を通してこの難問に取り組み、70 年初頭によく「探索の原理」という解答を提出する<sup>(50)</sup>。『グーテンベルグの銀河系』と『メディアの理解』は、マクルーハンによるメディア研究の青写真を示したという意味で主著と呼ぶに相応しいのである。

マクルーハンのメディア研究は発明の先取を前提にせざるをえない。昨今のマクルーハン研究の中には、このアポリアに光をあてる注目すべき指摘がある。門林は、『グーテンベルグの銀河系』で電気時代を束ねる発明に名指された電信の地位が、『メディアの理解』でテレビにすり替わっている点を指摘し、その原因を次のように分析する。「ここ（『メディアの理解』）でのマクルーハンのテーマは、グーテンベルグの銀河系に取って代わったマルコニの銀河系について、それが社会に浸透していく歴史を前著（『グーテンベルグの銀河系』）と同じ手つきで描き出すことはできないのだ。書きつつあるマクルーハン自身がさらさらされている電気時代は、マクルーハンの論述にそのような距離を許さない」（門林, 2009, pp. 153-54<sup>(51)</sup>）【（ ）内は筆者による補足】。『メディアの理解』で電信が発明の地位をテレビに譲ったように、『メディアの理解』の続編が書かれたとすれば、テレビはその地位を最新のメディアに譲らなければならなかっただろう。発明の地位とは、それ以前の発明の対照軸となりうるメディアによって常に更新され続けるものなのである。そして、メディアの最先端を記述する者は、静的な歴史的事実の記述には無縁の、動的な対象を補足することにともなう齟齬や矛盾の危険を引き受けなければならないのである。

門林の指摘は、進行中のコード化のプロセスを記述する時に直面する問題を的確に捉えているが、同じ問題を文化コード論の論理から説明することには、別のメリットがある。それは、もう一方の先端、つまり最新ではなく、最古のメディアを考える場合にも同様の問題に直面することを論理的に説明できる点である。そして、この事実こそ、ハヴロックとマクルーハンの議論の類似性を検証する際に手がかりを与えてくれる。

次の引用は、ハヴロックがマクルーハンと同型の文化コード論を展開してい

たことを窺わせる。「プラトン序説が完成されるやいなや、今度は、〈ソクラテス以前の思想家たち〉とその祖形であるヘシオドスへの序説が書かれる必要がある」(ハヴロック, 1963 村岡訳 1997, p. 366)。ある文化コードの画定は、その前（後）のコードの画定に依存する。現在という時間軸の先端を文化コードで捉えようとしたマクルーハンと同じ論理で、もう一方の先端を文化コードで捉えようとしたハヴロックも無限後退のアポリアを呼び込んでしまったようである。後年、マクルーハンは、コードとしての文化をパラダイムと言い換え、パラダイムを後方に置けばハヴロックが『プラトン序説』で行ったような歴史研究になり、前方に置けばメディア研究という科学になる、と述べている<sup>(52)</sup>。この記述は、マクルーハンの思想において文化コード論が維持され続けたことと、同型の論理がハヴロックの議論に見られることをマクルーハン自身が認識していた事実を説明すると解釈できる。他方、ハヴロックやマクルーハンと同じく文化と文字の文化を対比させながら、「こころと文化における非常に多くの変化が、声の文化から書くことへの移行に結びついている」と言うことは、書くこと（ないし、それに続く印刷）をそうしたすべての変化の唯一の原因とすることではない（オング, 1982 桜井他訳, 1991, p. 356）として、こころや文化の変化をメディアの変化に還元することに否定的な立場にあったオングの記述からは、文化コード論も、マクルーハンやハヴロックが経験した種類のアポリアも読み取ることはできない (e.g. Ong, 1955, pp. 95-100<sup>(53)</sup>)。これらの記述は、いずれも、ハヴロックとマクルーハンの類似性を証明する傍証となると考えられる。

### むすびにかえて

歴史学から印刷革命を論じた著書で、E・L・アイゼンステインはマクルーハンを次のように評している。「マクルーハンの業績は、印刷技術の登場が社会的にも心理的にも及ぼしたはずの影響力をはつきり気づかせてくれた点で、価値あるものではあった。しかし彼はまた、さまざまに異なる状況のもとで起こった幾多の相互作用を曖昧にぼかしてしまった」(アイゼンステイン, 1983 別宮他訳, 2001, p. 99<sup>(54)</sup>)。「マクルーハンや彼（ポール・サンガー）が抛り所とした学者たちが、中世の意思交換をあまりにも口頭に依存すると考えすぎていること、すでに筆者の時代から一部の知識人の間では広まっていた黙読の習慣を

誤って印刷技術がもたらしたものと決め付けてしまったことは、もはや明らかである」(*op. cit.*, pp. 99-100)。同書にはハヴロックについての以下のような評価も見られる。「この評論集 (Havelock, *The Literate revolution in Greece and its cultural consequence*, 1982) で著者は、『プラトン序説』同様、ギリシャ思想における口承から文章への移行を、議論を呼ぶような、独特的の刺激的なやり方で分析している」(*op. cit.*, xi)。

各論はともかく、総論においてマクルーハンとハヴロックの同質性を指摘する研究は管見にして知らない。また、トロント大学コミュニケーション学派における影響史の研究でも、H・イニスとマクルーハンの関係に比して、ハヴロックとマクルーハンの関係の研究は進んでいない。文化コード論を両者の接点と見做す議論が、両者の影響関係の研究に一石を投じ、リテラシー論を活性化させる起点になったとすれば幸いである。

## 註

- (1). 本稿は、博士論文（柴田崇 2008: 『20世紀におけるメディアム概念の成立と変容』 東京大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻）の第I部第1章に修正・加筆したものである。
- (2). マクルーハンの博士論文は、2006年に *The classical trivium* の題で公刊された。 cf. McLuhan, M. 2006: *The classical trivium: the place of Thomas Nashe in the learning of his time*, Gordon, T. (ed.), Gingko Press, Inc., CA. (McLuhan, M. 1943: *The classical trivium: the place of Thomas Nashe in the learning of his time*, the Cambridge University doctoral dissertation.).
- (3). e. g. McLuhan, E. / Zingrone, F. (eds.) 1995: *Essential McLuhan*, The House of Anansi Press, McLuhan, E. / Szklarek, J. (eds.) 1999: *The medium and the light*, Stoddart, Toronto.
- (4). *Who was Marshall McLuhan* (1994) の著者の一人の Maurice は実弟、*Touch the Earth* (1971) の著者の T. C. McLuhan は次女（テレサ）である。マクルーハンの経歴や家族構成については主にゴードンによる伝記（ゴードン W. T. 宮澤淳一（訳）2001: 『マクルーハン』 筑摩書房 (Gordon, W. T. (text)/ Wilmarth, S. (illustration) 1997: *McLuhan for beginners*, Writers and Readers, New York.) を参照した。
- (5). McLuhan, M. 1967: *The mechanical bride*, Beacon Press, Boston (original work published in 1951).
- (6). McLuhan, M. 1967: Conversation with McLuhan (by Stearn G. E.),

*Encounter*, vol. XXVIII, no. 6, pp. 50-58.

- (7). Ong, W. J. 1981: McLuhan as teacher: The future is a thing of the Past, *Journal of Communication*, vol. 31, no. 3. また、広告の研究については、*The mechanical bride*に先立ち、1947年に“American advertising”という小品を発表している。cf. McLuhan, M. 1995: American Advertising, McLuhan, E. / Zingrone, F. (eds.), *Essential McLuhan*, Basic Books, A division of HarperCollins Publishers, Inc., New York, NY. (McLuhan, M. 1947 October: American Advertising, *Horizon*).
- (8). 1-2における引用と解釈は、次の発表要旨論文とほぼ重なる（近藤聰 2008: 「マーシャル・マクルーハンの教育思想（1950～1960年代）：『メディアの理解』（1964）の思想背景としての「文学言語」と「教育」」 『全国大学国語教育学会発表要旨集』 pp. 165-68）。これは、筆者が引用資料を提供し解釈のアウトラインを提示した研究会に近藤氏が同席していたことによる。近藤氏は研究会の後、原典を入手して独自の訳出を行っており、資料提供の事実を注記しなかった点についても既に本人から釈明を受けている。
- (9). このような雑誌の構想自体は、マクルーハンがトロント大学のセントマイケルズカレッジに赴任した1946年頃には固まっていたとされる。cf. Kerckhove, D. 1981: Understanding McLuhan, *The Canadian Forum*, vol. LXI, no. 709, p. 9.
- (10). McLuhan, M. / Carpenter, E. 1956 Spring: The new language, *Chicago Review*, vol. 10, no. 1, The university of Chicago press.
- (11). このテーゼが初めて公の場で使われたのは、1958年に全米教育放送者協会の年次大会で基調講演をした時だったとされる（ゴードン, 1997 宮澤訳, 2001, p. 198.: 宮澤による年譜）。ベネディッティらも同様の指摘をしている (Benedetti, P. / DeHart, N. (eds.) 1997: *On and by Marshall McLuhan*, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts, p. 31)。
- (12). McLuhan, M. 1997: *The Gutenberg galaxy*, University of Toronto Press, Toronto Buffalo London (original work published in 1962.).
- (13). McLuhan, M. 1964: *Understanding media*, McGraw-Hill, New York.
- (14). 2の議論の骨子は以下の論文に初出。柴田崇 1998: 「マクルーハンにおける「メディア」の概念——コミュニケーションモデルの検証を通じての一考察——」『明治学院大学大学院国際学研究科 国際学研究科紀要』 第5号 pp. 1-20.
- (15). McLuhan, 1964, p. 242.
- (16). op. cit., p. 267. cf. McLuhan, M. / McLuhan E. 1988: *Laws of media*, University of Toronto press, Toronto Buffalo London, pp. 86-91, McLuhan, M. / Powers B. R. 1989: *The global village*, Oxford University Press, New York

Oxford, pp. 75-76.

- (17). Shannon, C. / Weaver, W. 1949: *The mathematical theory of communication*, The University of Illinois Press, p. 5.
- (18). *op. cit.*, p. 3.
- (19). *op. cit.*, p. 99.
- (20). *op. cit.*, p. 116.
- (21). シャノンは第七回（1950）、第八回（1951）、第十回（1953）の会議に、ヤコブソンは第五回（1948）の会議に参加した。cf. ハイムズ S. J. 忠平美幸（訳） 2001: 『サイバネティクス学者たち』 朝日新聞社 (Heims, S. J. 1991: *Constructing a social science for postwar America: the cybernetics groove, 1946~1953*, the MIT Press.) p. 396.
- (22). 1952年にインディアナ大学で開催された「人類学者・言語学者の会議」を締め括る際のヤコブソンのスピーチ（ヤコブソン R. 田村すゞ子（訳）：「人類学者・言語学者会議の成果」（Jakobson, R. 1953 April: Result of the conference of anthropologists and linguists, *Supplement to International Journal of American Linguistics*, vol. 19, no. 2, mem. 8.）（In Ruwet, N. (ed.) 1963: *Essais de linguistique générale*, Les Editions de Minuit, Pari.）, 川本茂雄（監訳） 1993: 『一般言語学』 みすず書房 pp. 3-20.）。
- (23). Jakobson, R. 1960a: Closing statement: Linguistics and poetics, Sebeok, T. A. (ed.), *Style in language*, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts, p. 353, p. 357.
- (24). *op. cit.*, p. 356.
- (25). Jakobson R. 1960b: Linguistics and communication theory, Waugh, L. R. / Monville-Burston, M. (eds.) 1995: *On language*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts London, pp. 489-97. Jakobson R. 1960b: Linguistics and communication theory, Waugh, L. R. / Monville-Burston, M. (eds.) 1995: *On language*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts London, pp. 495-96.
- (26). コンテクストに対応する関説的（または指示的）機能とは、従来、関説される第三人称をあらわすものだった（Jakobson, 1960a, p. 355）。つまり、ヤコブソンモデルのコンテクストとは、文脈的 contextual 意味と関説（事）物 referent の双方を含む概念である。D・H・ハイムズは、その点を指摘し、コンテクストを、場面 situation と話題内容 topic に分割することで、ヤコブソンモデルを修正した。ハイムズのモデルについては、池上（池上嘉彦 1992: 『詩学と文化記号論』 講談社 p. 182）を参照のこと。

- (27) cf. McLuhan, M. / Nevitt, B. 1972: *Take today*, Harcourt Brace Jovanovich, Inc., New York. p. 141.
- (28) McLuhan, 1964, p. 3. また、マクルーハンは次のようにも言っている。「もし『話しことばの内容は何か』と問われたならば、『それ自体は非言語的な、実際の思考過程』と答えざるを得ない」(McLuhan, 1964, p. 8)。この記述から、最も原初的な「発明」は「話しことば」ということになるが、話しことばが西欧に特有の「発明」ではないところから話しことばを含めた四つの区分を立てなかつたのだと考えられる。
- (29). マンフォード L. 三浦逸雄（訳） 1942: 『技術と文明』 育生社弘道閣 (Mumford, L. 1934: *Technics and civilization.*), p. 6. 同書の冒頭には、この三つの区分が、P・ゲデスによる二つの区分を参考にしたものであることが記されている。
- (30) cf. 三木清 1967: 『三木清全集 第七巻』 岩波書店, pp. 260-61.
- (31). マンフォード, 1934 三浦訳, 1942, p. 6.
- (32). McLuhan, M./ Watson, W. 1970: *From cliché to archetype*, The Viking Press, New York, p. 54, McLuhan, Nevitt, 1972, p. 122, etc.
- (33) McLuhan, 1967 (1951), pp. 33-34.
- (34). マンフォード L. 生田勉（訳） 1970: 『芸術と技術』 岩波書店 (Mumford, L. 1952: *Art and technics*, Bampton lectures in America, Columbia University Press, New York.)
- (35) Lord, A. B. 2000: *The singer of tales* 2nd edition, Mitchel S. / Nagy G. (eds.), Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts London, England (original work published in 1960.).
- (36) McLuhan, 1997 (1962), p. 1.
- (37) Lord, 2000 (1960), p. viii.
- (38) *op. cit.*, pp. 3-5.
- (39) *op. cit.*, p. 8.
- (40) *op. cit.*, p. 95.
- (41) *op. cit.*, p. 65.
- (42). では一体誰がホメロスの詩を書き止めたのか、という疑問が湧く。ロードは、紀元前 700 年以前の古代ギリシャにその人物が存在したという仮説を立てる (*op. cit.*, p. 156)。
- (43) *op. cit.*, p. xxiii.
- (44) McLuhan, 1964, p. 239.
- (45). オング W. J. 桜井直文・林正寛・糟谷啓介（訳） 1991: 『声の文化と文字の

- 文化』 藤原書店 (Ong, W. J. 1982: *Orality and literacy*, Methuen & Co. Ltd.) pp. 20-23.
- (46) ハヴロック E. 村岡晋一 (訳) 1997: 『プラトン序説』 新書館 (Havelock, E. A. 1994: *Preface to Plato*, 7th ed., Harvard University Press, Massachusetts (original work published in 1963).)
- (47) *op. cit.*, pp. 113-16.
- (48) 3-3 の議論の骨子は以下の論文に初出。柴田崇 1999: 「マクルーハンの身体論」『映像学』第 63 号 pp. 71-86.
- (49) McLuhan, 1964, p. 174.
- (50) 「探索の原理」の詳細については、拙稿（柴田崇 2009: 「マクルーハンの extension のオリジナリティーについて」『カナダ研究年報』第 29 号 pp. 33-50）を参照されたい。
- (51) 門林岳史 2009: 『ホワッチャ ドゥーイン マーシャル マクルーハン？ 感性論的メディア論』 NTT 出版
- (52) McLuhan, Nevitt, 1972, p. 15.
- (53) Ong, W. J. 1955 February: Space in Renaissance symbolism, *Explorations*, no. 4, University of Toronto, Toronto, Canada.
- (54) アイゼンステイン E. L. 別宮貞徳 (監訳)・小川昭子・家本清美・松岡直子・岩倉桂子 (訳) 2001: 『印刷革命』 みすず書房 (Eisenstein, E. L. 1983: *The printing revolution in early modern Europe*, Cambridge University Press, Cambridge.)